風呂と社交

八木三男

風呂にいれる趣味というものが普遍性をもつものかどうか、いまどきいい趣味なのか悪趣味なのかは知らない。

二十年以上たって水回りがだいぶ傷んだので、修理を機会にあたらしく庭先に下屋をおろして湯殿をつくった。湯殿の東と南を下からガラス張りにし、屋敷内に塀を廻らして風呂専用の庭をつくり、灯籠にほの明るい灯をともした。東にお城山の頂上の天守閣址の全景が見える。最近下草を刈り雑木を伐って一部分露出させた石垣の線が下の雑木林のなかに落ち込んでいる。南側は東から西に南の天を移る月を眺望できるように按配した。月はお城山の頂上から出る。還暦を過ぎて思い切ったひとつの贅沢なのである。

姪が三人の年配の友だちと旅の途次わたくしの家にたち寄った。来訪者は初対面だったが、例によって庭つき景色つきの自慢の風呂を見せたら、一様に感嘆していた。

見物客の感嘆の仕草やコトバはほぼパターンがきまっていて、最後に「逆にあのお城山の石垣から望遠鏡で見れば、こちらがよく見えるわけですよね」ということになる。わた

くしもそのことには多少の興味と不安をもっている。
「風呂をたてますから、どうぞおはいりください」
「いや、いや、とんでもないです」
六十歳がらみの女客の一人が、身をよじりながら手で遮った。初対面の他人の家で、昼間から裸になって風呂に入るなど、そんな不躾で奇想天外なことはできません、といいたげなのであった。
台所からリモコン式の最新型の風呂に湯を満たしたが、客たちは一様になんともいえぬ複雑な顔をしながら、入浴を断乎固辞して帰っていった。その時、わたくしに残念さが残ったから、これは一種の趣味になったのかもしれないと思った。
ある英書講読会のメンバーが新潟から遊びにきた。
最初にシカゴ娘の若いジュリーが風呂にはいった。彼女は日本にきてまだ日が浅いこともあって、日本の風呂は経験がなく、アパートではもっぱらシャワーを使っているという話だった。K夫人が、風呂の栓を抜かないこと、湯槽に石鹸をいれないこと等懇切に解説した。
「ジュリー、どうだった?」みんなが心配そうに聞いた。
「まるで天国にいるようだった」大満足でいった。
ついで、K夫人のところでホームステイ中のバイエルンの高校生リヒャルトがはいった。
「すばらしかった!」日本語でいいながら戻ってきた。無口な彼が帰りぎわに門の脇でもう一度いったから、よほど気に入ったのである。
「日本では風呂に招待する習慣があるのですか」ジュリーが訊ねた。
「それはないわね」K夫人が即座に答えた。
「いや、むかしあって、いまは廃れたってことだよ」と、わたくしがいった。
妻を含めてみんなが怪訝な顔をし、疑わしい目をわたくしにむけたので、少し解説するはめになった。
わたくしが子どものころ、近所のばあさんを必ず風呂に招んだ。家族も孫もいたのになぜそのばあさんだけがくるのか分からなかっ

た。その家に風呂があったものかなかったものかも分からない。ひとしきりおしゃべりし、刻み煙草をうまそうに吸ってから帰った。

戦国時代はわび茶の形成期である。奈良の僧、茶の湯の祖村田珠光（十五世紀末）は、「淋汗茶湯」という風呂と茶の湯が結びついたいわば民衆的な茶寄合のひとつの型のなかで育った。なお「淋汗」は汗を淋すと訓み、禅家で主に夏の風呂をいう。また、薩摩の『上井覚兼日記』に「拙宿風呂焼せ候て、若衆中呼候て入申候。風呂過候て、御酒種々振舞、茶湯など他」（『日本の茶書1』平凡社）とある。このような遊びを主体にして茶の湯と風呂を結びつけた猥雑な世界は、同時に磨ぎすまされたわび茶を創造していった。

鹿鳴館のころ日本に立ちよったフランスの作家ピエール・ロチの『秋の日本』というエセーをみると、ある日の夕方、彼は谷あいの村の農家の庭先で子どもが煮られているのを見た、とある。むろんすぐ風呂と認識するのだが、彼はその「凄絶な」光景から、竈を焚く親と風呂にはいっている子どもとの優しい閑かな対話を想像している。

考えてみると、昔の風呂は、水を汲む人、焚く人、はいる人の共同があって、それぞれなにかしゃべりあっていたように思う。いまは、リモコンでやり、人を招ぶことはなくなり、少なくとも一般家庭では風呂を介した社交性は失われた。

身内におくった年賀状に「自慢の風呂にはいりにくるように」と書いたら、元日にさっそく遠方の妹から電話があった。「いくわよー、ツアーを組んでいくわよ」。さすがに身内はわたくしの気持ちがよく分かる。

（やぎ みつお＝にいがた県民教育研究所所長）